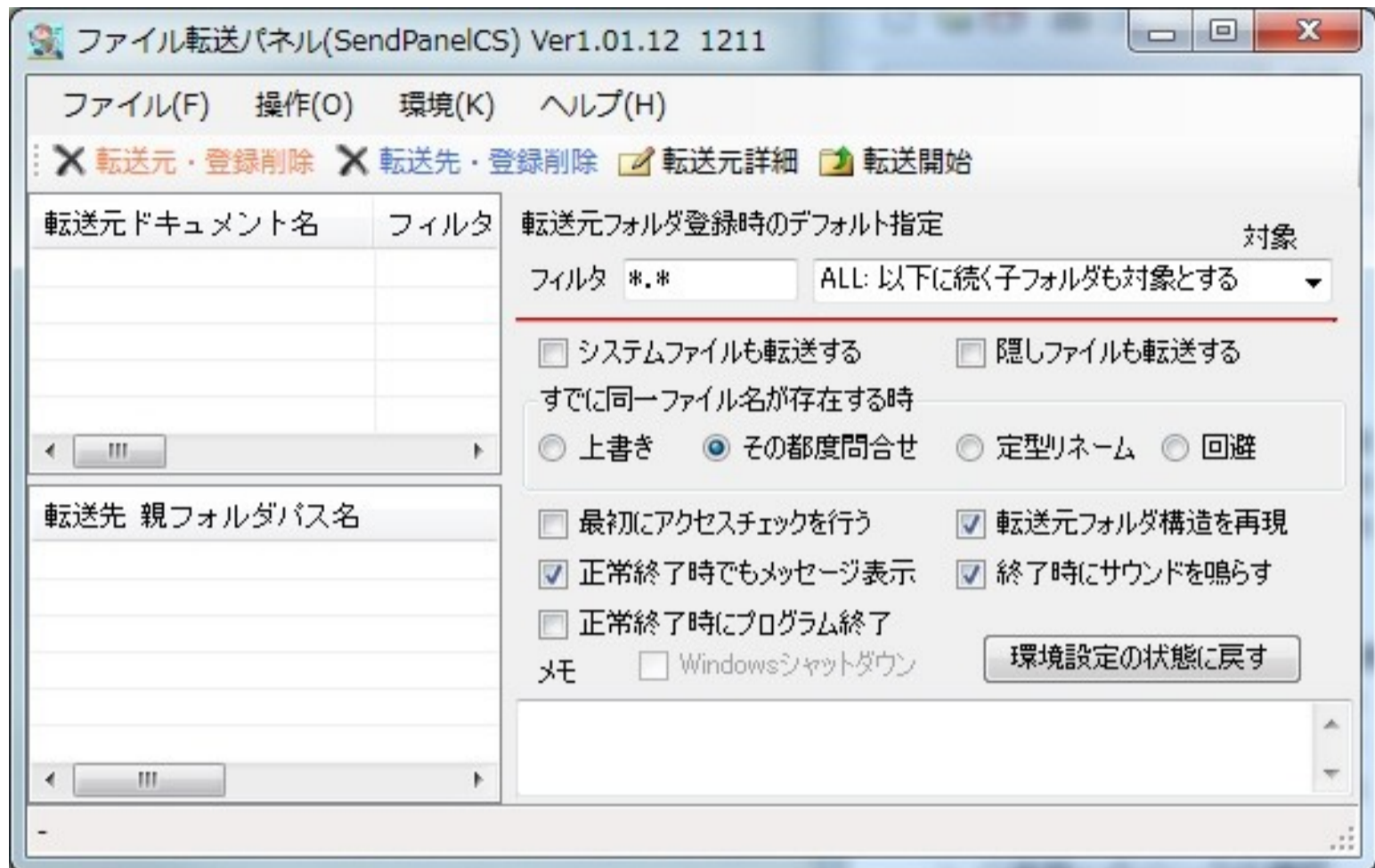




「転送パネル (SendPanelCS)」 Ver1.02.0
--- 定型タイプのファイルコピー ---



機能概略

「転送パネル (SendPanelCS)」は日常的に発生する定型的なファイルコピーを支援するツールです。このツールではファイルコピーのことを転送と称していますので以後「転送」と表記します。転送処理における転送元の指定、転送先の指定、および転送条件(転送パラメータ)を画面から選択して、それをXML形式のテキストファイル(拡張子:spnl)に保存し、いつでも再利用が出来るようにしたものです。転送元となるファイルはファイル個々での指定とフォルダ指定が可能です。転送先はフォルダを指定します。いずれも複数指定ができ、転送先でのリネームも可能です。

インストール

インストーラは用意していません。任意のドライブに新規にフォルダを作成します。
... 例えば D:¥SendPanelCS とか C:¥Program Files¥SendPanelCS など
その後解凍されたファイル全てコピーします。これでインストールは完了します。動作させるには、SendPanelCS.exe
ファイルをエクスプローラ上でダブルクリックします。
実行ファイルのショートカットをデスクトップやスタートメニューなどに置いておく使いやすくなります。
また、SendPanelCS定義ファイル(拡張子=spnl)に対するツールとして SendPanelCS.exe をウィンドウズ標準の関連付け
をしておくことをお勧めします。

ウィンドウズでの関連付けはウィンドウズのレジストリを追加しますので、これを回避したい場合は筆者作成の
DocLaunCS 内での関連付けを行えば、DocLaunCS から SendPanelCS設定ファイルがつかえます。

<< インストールするドライブのお勧め >>

慣例としてプログラムはシステムディスク(大抵はドライブ C:)にインストールされる場合が多いと思いますが、
インストーラを使用しない「転送パネル(SendPanelCS)」のインストールはドライブ D: など、データを保存するドライブにインストールすることをお勧めします。

Windows の調子がおかしくなり、ドライブ C: を過去の状態に戻すようなことがあっても「転送パネル(SendPanelCS)」はシステム環境の影響をほとんど受けません。マイクロソフトの .NET Framework 2.0 が動作していればまず動きます。

「転送パネル(SendPanelCS)」はインストールフォルダーへの単なるコピーでインストールが完了します。
インストール時には Windows が管理しているレジストリ等は使用していません。また、動作中も能動的にレジストリの読み書きは行っていません。システムフォルダも参照していません。
... ただし、Windows上でユーザが別個に指定する拡張子 spnl に対する関連付けはレジストリに記録されます。
その他 Windows が動作中に自動でレジストリに記録するものがあります。

バージョンアップ

解凍されたファイル全てを上書きコピーしてください。各種設定ファイルなどこれまでの環境にかかわるものはそのまま引き継ぎます。既存の環境を壊すことはありません。

「転送パネル(SendPanelCS)」のメニューバーの [ファイル] - [インストール先フォルダを開き終了] は、インストールフォルダを開くと同時にアプリケーションも終了するのでバージョンアップ時には便利です。

アンインストール

アンインストーラはありません。SendPanelCS を終了させた後、SendPanelCS.exe が収まっているフォルダごと削除してください。
インストール時や動作時にレジストリは使っていないのでアンインストールはこれで完了です。

手動で、拡張子 spnl をウィンドウズ標準の関連付け操作を行っている場合は、レジストリに残ります。
この削除はエクスプローラを起動して、「ツール」-「フォルダオプション」の「ファイルタイプ」タブで spnl を探し出し削除してください。
... 他のものを消さないよう注意して行ってください。

動作環境

「転送パネル(SendPanelCS)」は以下の Windows 32bit/64bit版環境で動作を確認しています。

<動作条件>

日本語 Windows 2000(sp4) + .NET Framework 2.0
日本語 Windows XP(sp3) + .NET Framework 2.0

~~~~~

日本語 Windows Vista の 32bit版 / 64bit版  
日本語 Windows 7 / 8 の 32bit版 / 64bit版

初期状態で「.NET Framework 2.0」がインストールされていなければインストールが必要です。

最新の日本語 Windows 8 は「.NET Framework 4.0」がインストールされていますが「.NET Framework 2.0」はインストールされていないようです。

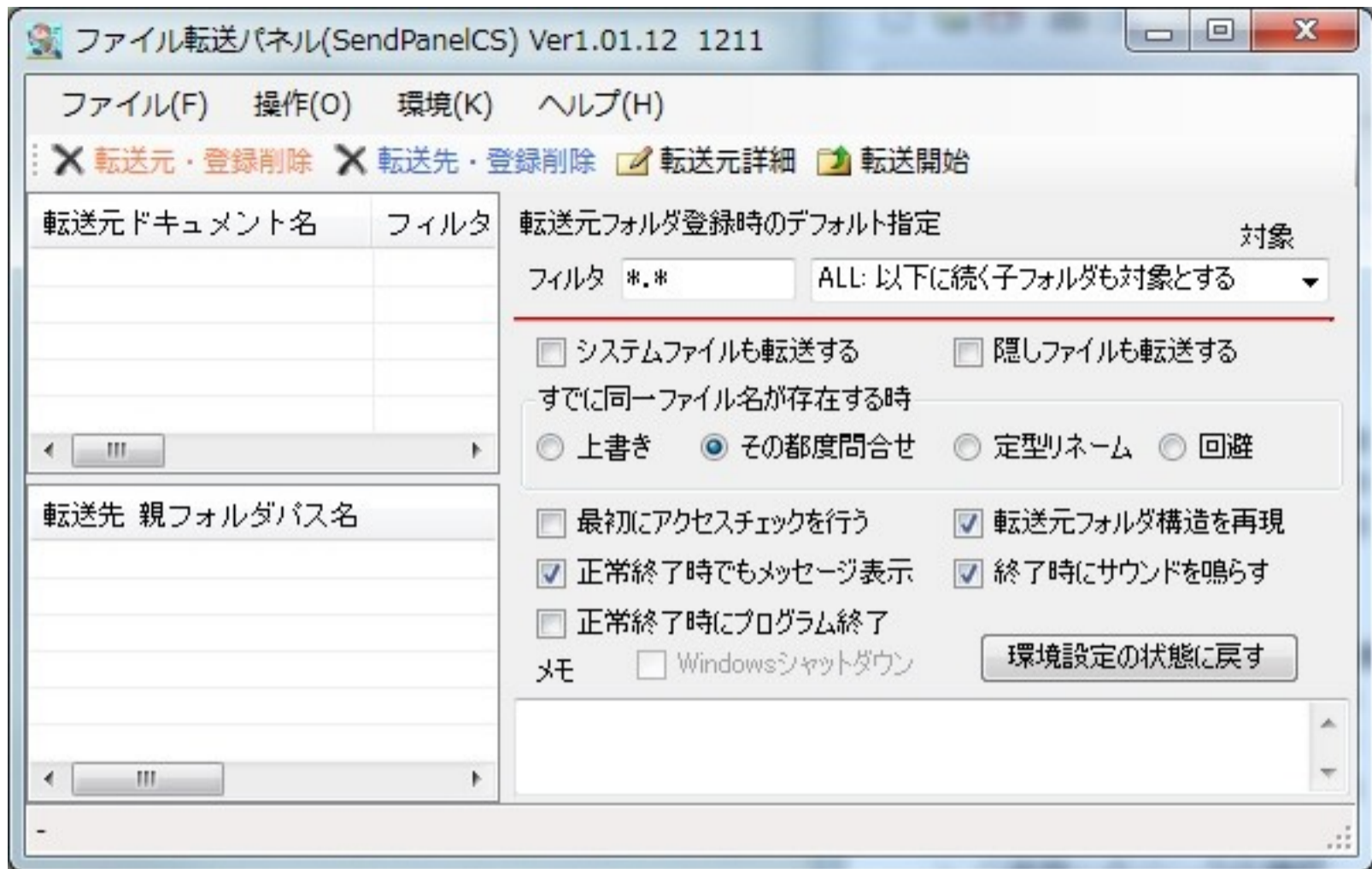
... Windows Update の実行でインストールが可能です。(2012/12/14 現在)

「転送パネル(SendPanelCS)」は32bit版ツールです。

... 64bit仕様のパソコンでは 32bitモードで動作します。

### 最初の起動・本体画面

本体を起動すると以下の画面が表示されます。



大まかに、左上に「転送元・フォルダ、ファイル情報」、左下に「転送先・フォルダ情報」、右側に「転送時の条件パラメータ」

を配置しています。

転送元および転送先のファイル、フォルダの指定はファイル管理ツール(エクスプローラなど)からドラッグ・ドロップで行います。

#### >> 「転送元・フォルダ、ファイル情報」

- ・ 転送元ドキュメント名 [チェックマーク付き]

転送元のファイル名のことです。拡張子を含みます。

フォルダを指定した場合はフォルダパスの中の最下位のフォルダ名を転送元ドキュメント名としています。

この項目はチェックのオン・オフが付き、転送の対象になるのはチェックが付いているものだけです。

... 「登録はしているが今回は転送からはずす」といったことが可能です。

- ・ フィルタ

転送元がフォルダのときのみ有効です。指定されたフォルダで転送するファイルを拡張子で絞り込めます。

例: \*.txt (テキスト) \*.\* (全てのファイル)

ドキュメントがファイルの場合は意味がありません。 - が表示されます。

- ・ 対象

転送元がフォルダのときのみ有効です。指定されたフォルダに続く子フォルダも転送の対象にするかの指定です。

TOP: ドキュメントで指定されたフォルダのみで、子フォルダのファイルは転送の対象にしない。

ALL: ドキュメントで指定されたフォルダに続く子フォルダも転送の対象にする

- ・ 転送先ドキュメント名

登録時は転送元ドキュメント名と同一になります。登録後に変更が可能です。... 転送時のリネーム。

フォルダ指定の場合この時のリネームは転送先フォルダ名(1箇所)のみで個々のファイルのリネームではありません。

- ・ 転送元ドキュメント親フォルダパス名

転送元ドキュメントのパス名はここでの「転送元ドキュメント親フォルダパス名」と「転送元ドキュメント名」に分割して

表示されています。

#### >> 「転送先・フォルダ情報」

- ・ 転送先親フォルダパス名 [チェックマーク付き]

単純に転送先のことです。フォルダのみ有効でファイルの指定は不可です。

フォルダ転送の場合はこの「転送先親フォルダパス名」に子フォルダとして転送元ドキュメントのフォルダが作成されます。

... ただし、転送元ドキュメントのフォルダが空欄の場合は作成されずに直接ファイルが転送されます。

この項目はチェックのオン・オフが付き、転送先の対象になるのはチェックが付いているものだけです。

... 「登録はしているが今回の転送先からはずす」といったことが可能です。

#### >> 「転送元フォルダ登録時のデフォルト指定」

ここでの指定は転送元ドキュメント(フォルダ)としてファイル管理ツールからドラッグ・ドロップをするときのデフォルト指定です。

登録後に個別に変更が可能です。なお転送時での動作にはかかりありません。

- ・フィルタ

ドラッグ・ドロップ時に「転送元・フォルダ、ファイル情報」のフィルタのデフォルト値として使用されます。

- ・対象

ドラッグ・ドロップ時に「転送元・フォルダ、ファイル情報」の対象のデフォルト値として使用されます。

>> 「転送時の条件パラメータ」

- ・システムファイルも転送する

システムファイルとは簡単に言えば Windows自体が作成・管理しているファイルです。

隠しファイル(見えないファイル)になっているものもあります。

通常のバックアップ等には転送の必要は無いと思われませんが必要ならチェックをいれます。上書き警告が出る場合があります。

- ・隠しファイルも転送する

隠しファイルの多くはシステムファイルです。

通常のバックアップ等には転送の必要は無いと思われませんが必要ならチェックをいれます。上書き警告が出る場合があります。

[転送先に同一名のファイルもしくはフォルダがあるとき]の処理指定

- ・上書き

同一名がフォルダの場合は転送が回避されます。(エラーメッセージで処理終了後にパス名報告)

- ・その都度問い合わせ

問い合わせ画面が表示され、上書き、リネーム、回避等が選択できます。

- ・定型リネーム

既定のファイル名の変更(ナンバー追加)により転送が続行されます。

- ・回避

転送が回避されます。... 古いファイルが残ります。

- ・最初にアクセスチェックを行う

大量のファイル転送を行う場合時間がかかるので、途中エラーを回避するため、転送元ファイルや転送先フォルダなどが実際に

アクセスできるかを事前にチェックしておこうというものです。

また、「上書き確認のためオペレータ入力待ちで止まっていた」などというものを回避するための事前チェックです。

ただし、大まかなチェックで転送処理を完全にシミュレーションしているわけでもありません。

また、転送元ドキュメントがフォルダ指定で階層が深い場合は時間がかかります。

- ・転送元フォルダ構造を再現

転送元ドキュメントがフォルダの場合、そのフォルダ構造を転送先フォルダに構築するかのチェックです。通常はチェックします。

チェックが無いときは同一フォルダに全てのファイルが転送されますので同一名ファイル重複の可能性が高くなります。

- ・正常終了時でもメッセージ表示

そのままの意味です。正常メッセージでエラーが無かったことを確認するためのものです。

- ・終了時にサウンドを鳴らす。

そのままの意味です。正常終了時とエラー(確認警告を含む)では音色を別にしています。

- ・正常終了時にプログラム終了

そのままの意味です。エラー(確認警告を含む)では終了せずにメッセージを表示しています。

Windowsのシャットダウンはまだ対応していません。

>> 「その他」

- ・環境設定の状態に戻すボタン

「転送時の条件パラメータ」は転送開始直前にパラメータ内容を変更と確認のためスイッチ機能ですが、

「転送元フォルダ登録時のデフォルト指定」

と「転送時の条件パラメータ」は環境設定にデフォルト値として設定を保存しています。一括でデフォルトに戻したいときに使用します。

- ・メモ

転送元、転送先、および転送パラメータは設定ファイルとして保存することが可能です。(拡張子:spnl)

このときメモ内容も保存します。転送の目的や実行するときの注意事項を書き込んでおくと間違いを回避できます。

## メニューの操作

[ファイル]-[ファイル(.spnl)を開く]

拡張子spnlのファイル(spnlファイル)を読み込み登録されたファイル転送の諸情報の設定を再現します。

同時に、読み込んだ spnlファイル名を本体画面のタイトル部に表示します。

[ファイル]-[ファイル(.spnl)の保存]



ファイル転送の、転送元、転送先、および各種パラメータなどの諸情報を指定されたファイルに保存します。  
読み込みなどで現在の spnlファイル名が存在する場合はデフォルトでその名前が候補に挙がります。

[ファイル]-[ファイル(.spnl)の上書き保存]

ファイル転送の、転送元、転送先、および各種パラメータなどの諸情報を保存します。  
読み込みなどで現在の spnlファイル名が存在する場合は確認することなくそのファイルで上書きします。  
現在の spnlファイルが存在しない場合は [ファイル(.spnl)の保存] と同じ動作をします。

[ファイル]-[標準フォルダを開く]

ファイル転送の諸情報の保存ファイルである spnlファイルの保存先として特定のフォルダを環境設定で指定することができます。そこで指定されたフォルダを開きます。

[ファイル]-[インストール先フォルダを開く]

ファイル転送パネル(SendPanelCS)のインストール先フォルダを開きます。

[ファイル]-[インストール先フォルダを開き終了]

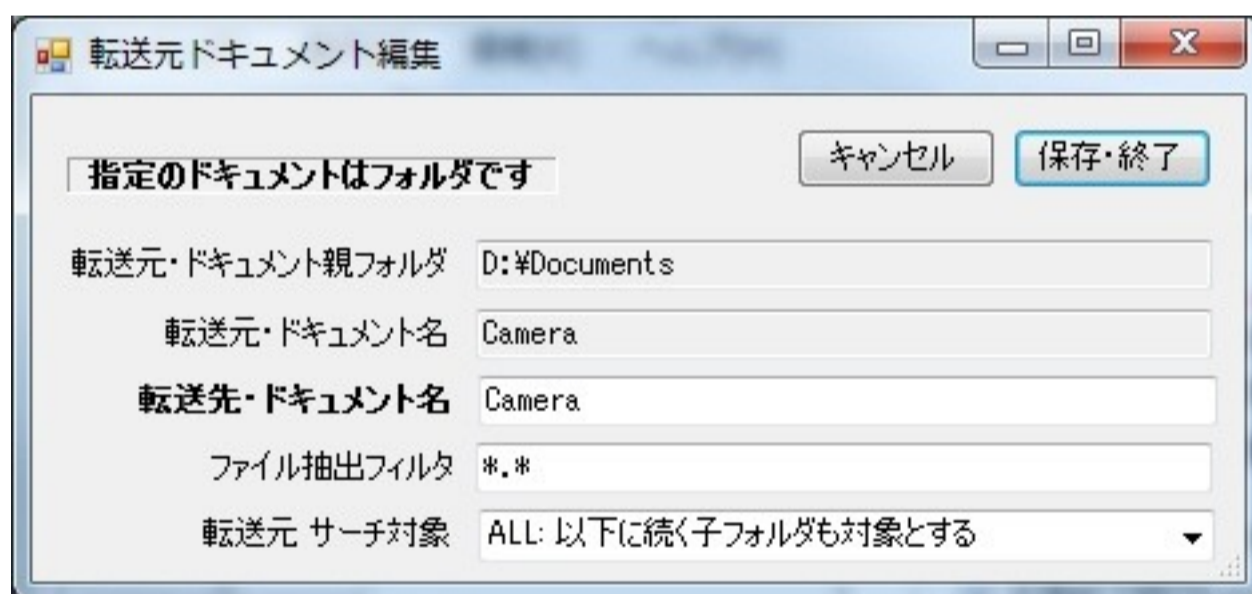
ファイル転送パネル(SendPanelCS)のインストール先フォルダを開き、そのあとアプリケーションを終了させます。  
アプリケーションのバージョンアップなどに使用します。

[操作]-[転送開始]

ファイル転送の諸情報にそって転送を開始します。  
転送が開始されると、画面下部のステータス領域、もしくはダイアログが表示され経過情報が表示されます。

[操作]-[転送元情報の詳細設定]

転送元はエクスプローラなどのファイル管理ツールのドラッグ・ドロップで指定のデフォルトで一旦設定されますが変更が可能です。  
変更するドキュメントを転送元ドキュメントリストから選択(1個)して、[転送元情報の詳細設定]をクリックすると以下のダイアログが表示されます。



上の例は転送元ドキュメントとして Camera というフォルダを選択したものです。変更可能なものは以下の3種類です。

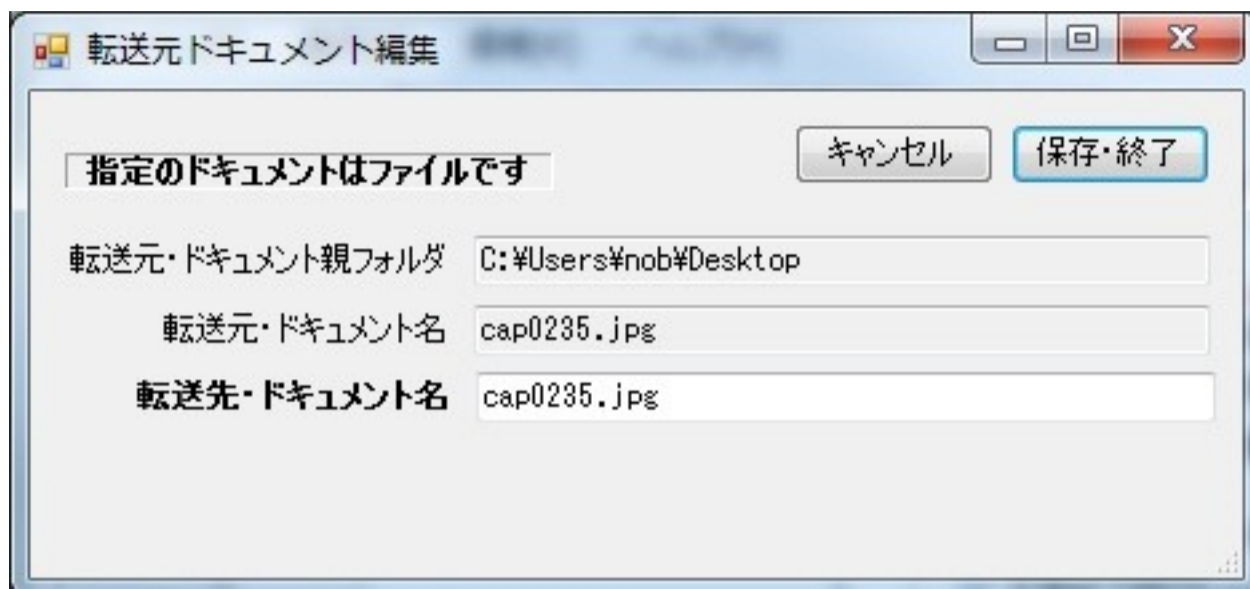
- ・ [転送先ドキュメント名]  
転送先に再現されるフォルダはデフォルトでは転送元と同一になっています。  
変更が可能です。例: Camera\_保存 など
- ・ [ファイル抽出フィルタ]  
転送元フォルダ内部からファイルを抽出するときのフィルタです。デフォルトでは全てのファイルを意味する \*.\* となっています。  
変更が可能です。例: \*.jpg ... 拡張子 jpg のみのファイルだ抽出して転送の対象とします。
- ・ [転送元検索対象]

指定された転送元のフォルダに子フォルダがあった場合はその子フォルダ内のファイルも転送の対象にするかの指定です。

以下のいずれかに変更が可能です。

>[ALL: 以下に続く子フォルダも対象とする] ... 転送元ドキュメントリストでは ALL と表示。

>[TOP: トップフォルダのみを対象とする] ... 転送元ドキュメントリストでは TOP と表示。



上の例は転送元ドキュメントとして cap0235.jpg というファイルを選択したものです。フォルダの場合と違って変更できるのはファイル名のみです。

・ [転送先ドキュメント名]

転送先に再現されるファイル名はデフォルトでは転送元と同一になっています。

変更が可能です。例：画面切り取り.jpg など

[操作]-[転送元登録削除]

転送元に登録したドキュメントを選択して登録削除を行います。ドキュメントそのものを削除するわけではありません。

複数指定が可能です。

[操作]-[転送先登録削除]

転送先に登録したドキュメント(フォルダ)を選択して登録削除を行います。ドキュメントそのものを削除するわけではありません。

複数指定が可能です。

[環境]-[環境設定]

環境設定ダイアログ画面を表示して事前デフォルト設定などの環境設定を行います。

... 環境設定 参照

[ヘルプ]-[バージョン情報]

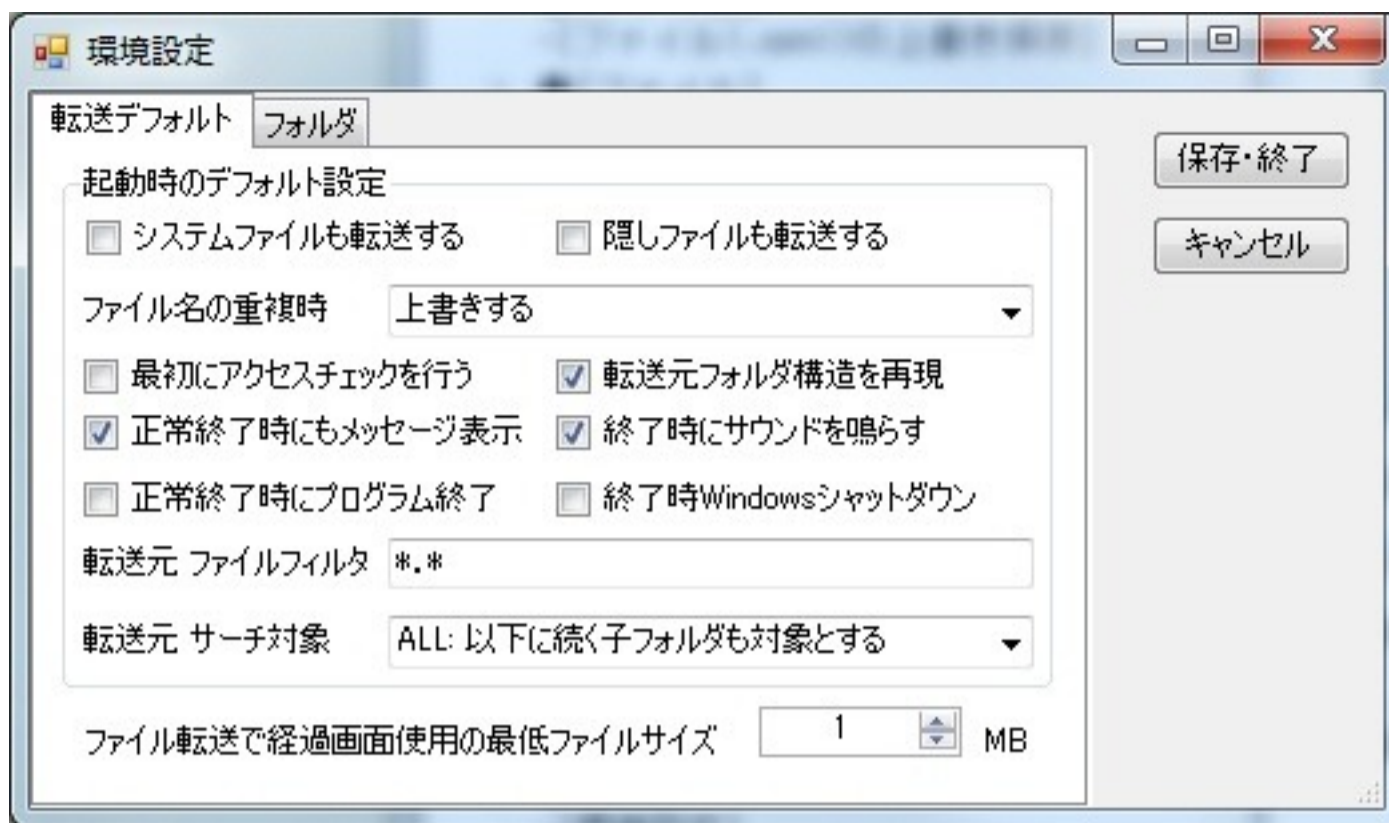
「転送パネル (SendPanelICS)」の製品情報を表示します。

[ヘルプ]-[サポートWebページ]

最新バージョンの公開などのサポートページへのアドレスです。(インターネット接続)

環境設定

[転送デフォルト]タブ



転送デフォルトタブは、アプリケーション起動時の初期画面とほぼ同じです。ここでの設定が起動時の初期画面となります。  
 詳細は「最初の起動・本体画面」参照してください。

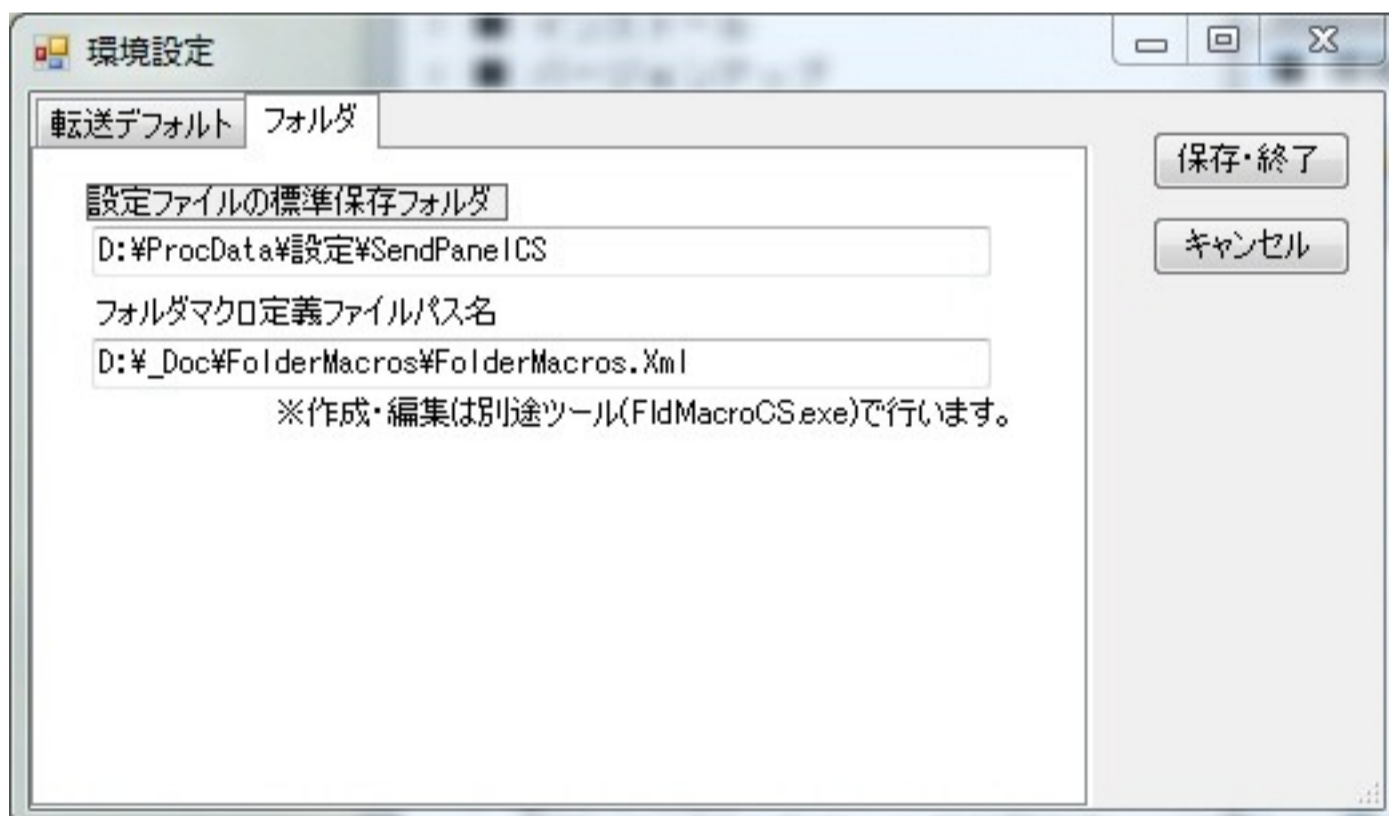
・「ファイル転送で経過画面使用の最低ファイルサイズ」

ファイル転送時はその途中経過を画面表示するような仕様になっていますが、小サイズのファイルの場合は単に転送速度を落とすのみで

表示の意味はあまりありません。ここで指定されたファイルサイズ以上の場合は途中経過をダイアログ画面で表示します。

途中経過の表示は転送速度が落ちます。この値を =0 にすれば経過表示は行いませんが転送速度は上がります。

[フォルダ]タブ



・「設定ファイルの標準保存フォルダ」

転送条件を保存した spnlファイルを標準的に保存するフォルダの指定です。

ここに有効なフォルダパスが指定されているとメニューから spnlファイルを開く場合に最初にこのフォルダが参照されます。

また、メニューの[標準フォルダを開く]でもこのフォルダが参照されます。

・フォルダマクロ定義ファイルパス名

フォルダマクロ定義とはフォルダパス名を別名で置き換える試みです。画像に表示されている

「Foldermacros.Xml」ファイルは  
 別名(文字列と)実際のファイルパス名の対応表が保存されています。  
 この機能を使うには本アプリケーションとは独立したフォルダマクロ編集ツール( FldMacroCS.exe )が必要です。  
 ... ヘルプ画面より Webページ「屋根裏実験室」参照。

起動書式

> SendPanelCS <spnlファイルパス名> /g /e

- ・ <spnlファイルパス名>

「転送パネル(SendPanelCS)」が起動されたとき spnlファイルパス名が指定されたときそのファイルを読み込み、本体画面を表示します。

- ・ /g ... 自動スタート

spnlファイルパス名が指定され、そのファイルを読み込んで本体画面が表示されたとき、指定の転送処理を開始します。

<spnlファイルパス名> が指定されていないければ、この指定は無意味で無視されます。

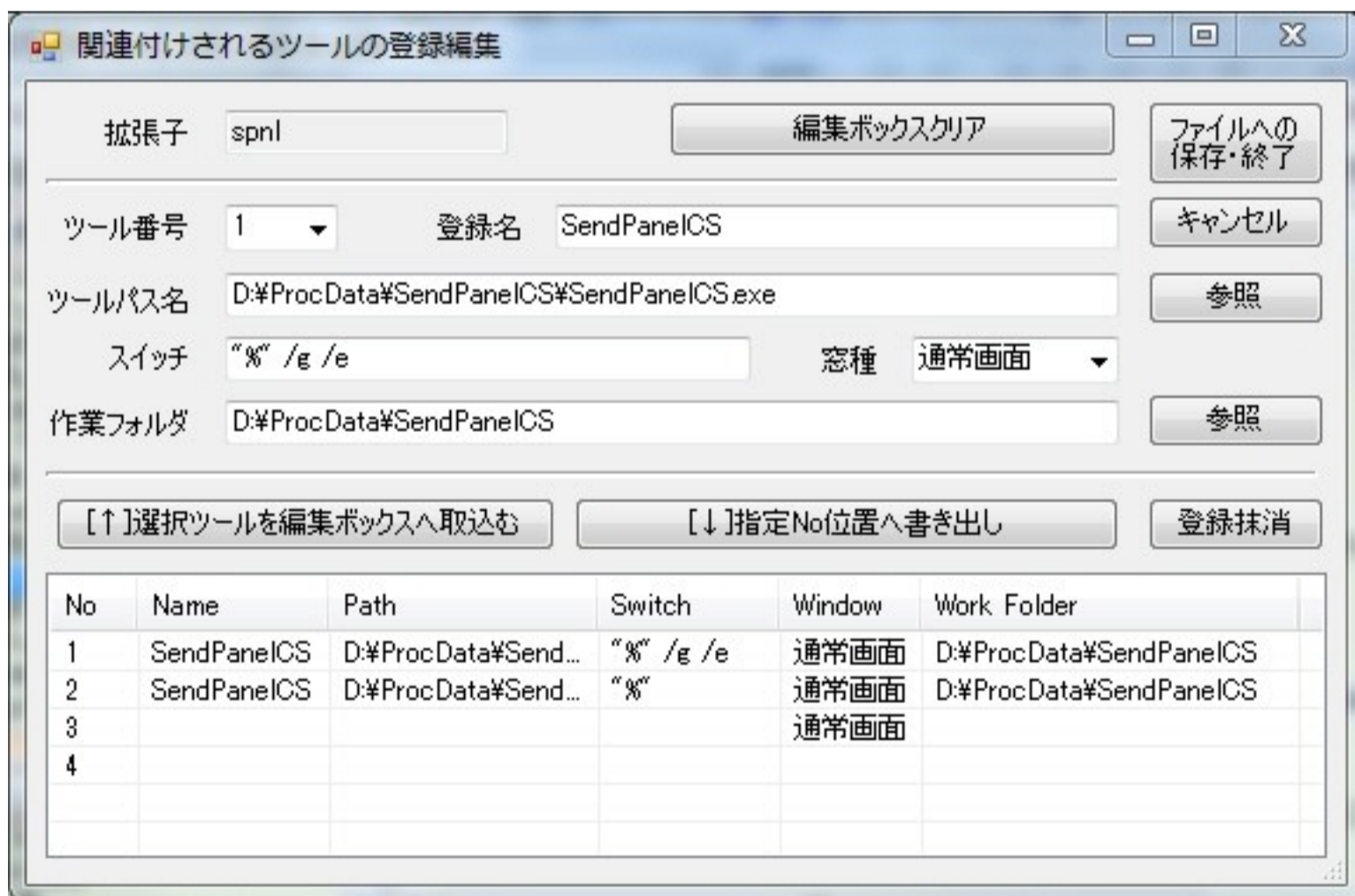
- ・ /e ... 自動終了

spnlファイルパス名と /g が指定され、自動スタートで転送がなされたとき転送終了時に自動的にアプリケーションも終了します。

自動スタートがなされていないときは /e の自動終了指定は無効になります。

... 通常の自動終了は転送条件の「正常終了時プログラム終了」をチェックします。

DocLaunCS での関連付けの例



上図の例は DocLaunCS での登録の例です。  
 この例では、ファイル転送パネルの実行ファイル(SendPanelCS.exe) D:\ProcData\SendPanelCS にインストールされています。  
 No.1 の関連付けは /g /e を指定して起動したならば自動スタート、自動終了の指定です。  
 No.2 の関連付けは 指定された spnlファイルを開いてメイン画面の表示のみです。転送開始は手動で行います。



... 転送パラメータの変更などが可能な指定です。

DocLaunCS(ドク・ラン)については  
ヘルプ画面より Webページ「屋根裏実験室」参照。